

竹富町副読本「結び合う島じま」作成調査報告書

2002/8/11

テーマ：「小浜島におけるリゾートと地域の共生」

奥間 建

テーマ設定の理由

小浜島は、竹富町において本土の大型資本が参入し、リゾートを展開した初めての地域である。現在では 2 つの大型資本が参入しそれぞれ事業を展開している。また、「観光立県」を掲げる沖縄県ではさらなる開発が予想され、この事は八重山圏でも同様である。しかし環境に対する意識等が高まり、大型のリゾート施設がもたらす弊害は以前より問題となっている。このような状況の中で、地域住民がどのような背景でリゾート開発を受け入れたのか、また「リゾート」が島にもたらしたものは何か、について考えることは、小浜島の子供たちだけではなく、それぞれの島の子供たちにとっても「身近」に感じることができると考えた。また、それぞれの島の子供たちが自分の住む島や他の島の未来を考えるためのテーマの一つになると考えた。

小浜島の概要

小浜島は、周囲 16.6km、面積 7.82 km² (他にカヤマ島 0.39 km²)、世帯数 238 戸、人口 473 人 (2001 年 3 月現在) の島である¹。島の中心部に位置する小浜集落では、サトウキビを中心とする農業が主な産業で、港の近くに含蜜糖工場がある。また、島の西端にある細崎(くばざき)集落は、竹富町内で唯一漁業を中心とする集落であり、漁港が整備され、近海の刺し網漁などが盛んである。観光入域客数は以下のとおり増加傾向にある。

小浜島の観光入域客数 (単位 人)

年度 \ 島名	昭和 50 年	昭和 60 年	平成 11 年
小浜島	11,916	40,476	55,012

資料出所 沖縄県企画開発部地域・離島振興局 離島関係資料 平成 14 年 1 月 より作成

小浜島のリゾート施設

1、リゾート施設の概要

小浜島には現在 2 つのリゾート施設が存在する。1979 年より営業している「ヤマハリゾート はいむるぶし」と、2001 年よりオープンしたユニマツリゾート「南西楽園 小浜島リゾート」である。10 年ほど前にはもうひとつのリゾート施設「キャロット インターナショナル コーラルアイランド」があったが、4,5 年程前に廃業している²。

「ヤマハリゾート はいむるぶし」

「ヤマハリゾート はいむるぶし」については、松村（2001）が詳細にまとめているので、一部掲載する。「オープン当初は部屋数が40室と比較的少なく、10年前までは周遊型の観光客を断っていた。しかし、開業以来、単年度決算で黒字になることはなく、1990年代になってから周遊型の観光客を受け入れ、部屋数を138室まで増やすなど対応しても、なかなか経営は改善されなかった。結局、1996年に親会社の「ヤマハリゾート（株）」から分社独立し、「（株）はいむるぶし」としてリスタートを切った。職員の給与を大幅にカットしたり、部屋数を120室に減らしたり、所有していた船を売却するなど経営の合理化を図り、翌年度は初の黒字に転換したという³。」

「はいむるぶし」

- ・オープン：1979年7月15日
- ・敷地面積：約150ha
- ・部屋数：120室（2002年） オープン当時は40室

過去6年の宿泊客数の推移（単位 泊）

	宿泊客数
1996	68,441
1997	83,390
1998	80,619
1999	77,363
2000	76,367
2001	81,768

「はいむるぶし」資料より作成

「南西楽園 小浜島リゾート」

「南西楽園 小浜島リゾート」は、ゴルフ場「ハイムルミラージュカントリークラブ」とクラブハウスを囲む八棟の宿泊施設「ヴィラ・ハピラパナ」というコテージタイプの宿泊施設がある。敷地が「はいむるぶし」の近くにあり、ゴルフ場は「はいむるぶし」からも予約受付を行っている⁴。

このゴルフ場は「はいむるぶし」の親会社（ヤマハ）が計画していたものを、（株）ユニマットリゾートが引き継いだ形で、施工されたものである。（松村 2001）

2002年1月から7月までの宿泊客数は3,189名、ゴルフ目的の客数は1,980名となっている。ゴルフ客の比率は6：4の割合で地元（特に石垣から）の客である。また、両施設が利用できるようカートで自由に行き来できるようになっており、施設利用後の送迎をそれぞれが協力し合うことが両者間で取り決められている。現在、新たにラグーンの建

設とそれを囲うように 70 室の宿泊施設、そしてビーチの開発を予定しているという。

「南西楽園 小浜島リゾート」

- ・ オープン：2001 年 11 月 23 日 仮オープン 2002 年 4 月 1 日 本オープン
- ・ 敷地面積：約 120ha
- ・ 部屋数：コテージ 52 室（2002 年）

2、リゾート進出の背景

小浜島での観光リゾートは 30 年前より進出した「はいむるぶし」を中心に展開されており、以下より「はいむるぶし」の進出した経緯を中心に追っていく。

(1) 「はいむるぶし」進出の経緯とその背景

「はいむるぶし」進出の経緯⁵

- ・ 1972 年、日本楽器製造株式会社（以下、ヤマハ）が八重山諸島で大型観光事業に着手しようとしていることが明らかになる。当初の構想は、小浜島、西表島、新城島にリゾート施設を建設し、離島間を船で往来しようというものだった。しかし、西表島では、仲間川河口付近のヤッサ島をほぼ買収した時点で、農地転用の許可が県から下りず、開発を断念し、また新城島は会社の保養施設を建設しただけなので、結局、小浜島だけが大型リゾート施設を受け入れた。
- ・ ヤマハによる観光事業の展開について、県や町は積極的に誘致する方向で動いた。また、地元の小浜公民館も 1973 年、誘致促進の決議を下した。当時は、県内に本格的なリゾート施設が少なく、竹富町内には皆無だった。
- ・ しかし、海洋レジャーについては、細崎集落の漁民からの反発は強く、八重山漁協が中心となって漁業権を放棄しなかった。
- ・ 1979 年「ヤマハリゾート はいむるぶし」としてオープン

「リゾート」を受け入れた背景

- ・ 1971 年の大干ばつにより、島の中心産業であるサトウキビの収穫量が大幅に落ち込み、当時「小浜製糖」を運営していた大洋漁業が小浜島から撤退し、小浜製糖の工場が廃止寸前に追い込まれた。
- ・ 島の経済が破綻するという危機意識から、小浜公民館が 2,000 万円で買い取るようになった。この時、竹富町は 1,500 万円を出資。竹富町は、現在の「はいむるぶし」の敷地に約 80 町近い町有地を持っており、それをヤマハに売却し、大金を得たから。
- ・ 町有地は、以前は森・田んぼ・畑であったが、地質が悪かったそうで、農業には適さず、開墾し払い下げられても購入しよう考える人はあまりいなかった。（以上 松村 2001 より）
- ・ しかし、「ヤマハ」の進出に、地域住民より反対運動がなされた。（以下 参考文献より）

(ヤマハは)西表島仲間川河口のヤッサ島、そして小浜島のビルマ崎の買占めに総力を挙げていた。行政や地方政治の衝にある者、農家と接触の強い小浜航路の船員等を手下にして、予定地百五十ヘクタールのうち約半分近くの個人有地を、当初三、三平方メートル(一坪)当り一ドル、復帰後円に移行して徐々に値上げしていき一九七五年(昭五〇)年頃には千円程度で買いあさってしまった。八十町近い町有地も、勿論議会の承認のもとではあるが売却処分されてしまった。地元では、小浜開発期成会を発足させ、観光企業誘致による島の活性化を図るためと称し、土地買い占めへの協力体制をとっていた。島外転出の地主に対しては、文書をもって協力を呼びかけ、土地を手離すよう催促し、地代についても会の決定する金額で協力せよと積極的に動いていた。(慶田盛, 1988) 6。

「南西楽園 小浜島リゾート」設立の背景

- ・ゴルフ場建設はもともと「はいむるぶし」が計画し事業許可を得ていたが、「はいむるぶし」が赤字続きであったため、権利書を「ユニマツトリゾート」へ売却した。
- ・しかし「ゴルフ場」建設に対し、建設予定地の近海でモズク養殖を行なっている漁師たちの不安があった。

3、リゾート施設と地域との関わり

(1) 地元産業(農業、漁業)との関わり

- ・野菜・果物等の農産物については、「はいむるぶし」・「南西楽園」と小浜島との関係は希薄 小浜島での農作物が、ほとんどがサトウキビであり、野菜・果物等の仕入れはほぼすべて石垣島から行なっている。
- ・鮮魚については、細崎の漁師より優先的に買うという協定が結ばれている。また、魚の取引について、漁師はそれぞれの考えで漁を行っており、問題が起きないように集落内で伝票を整理して取引を行なうことになっている。魚の値段はその種類によって事前に決められている。
- ・モズクについては、天然モズクのみ取引を行なっている。(はいむるぶし)

1981年、「はいむるぶし」がオープンした2年後の「はいむるぶし」と地元産業との関係について、「西表島土地を守る会」と「西表地区宿泊業組合」によるレポートがあるので、それから伺い知ることができる(西表島土地を守る会・西表地区宿泊業組合, 1982) 7

『ヤマハは「地元の野菜も魚も買う、又雇用も地元を優先的に採用する」と言ってきたのに、その約束が次第に守られなくなっていると報告している。たとえば、野菜は地元から全く買っていないし、魚についても上等な魚は買ってくれるが、小浜近海でよくとれる魚は買わないので漁協へ出すようになったとある。』(松村 2001)

また、沖縄開発庁沖縄総合事務局(1986)のアンケート調査では、野菜、果物等農作物に関する地元からの仕入れについて、野菜購入地は、購入金額に対する割合で「地元(竹

富町産は 20%)」果物は同様の割合で「地元(竹富町産は 60%)」となっている。また、鮮魚の購入地は同様の割合で「地元竹富町から 60%」となっている⁸⁾。

- ・今回の聞き取り調査において「はいむるぶし」「南西楽園」とともに、野菜・果物等の農作物についての関係は希薄(ほぼすべて石垣からの仕入れ)であった。
- ・魚については、以前は地元の漁師達のみから仕入れていたが、バブル崩壊後の不況の影響や、「はいむるぶし」の経営状況の悪化に伴い、徐々に取引先を安価な業者に変えていくようになったという。ただ、一般的ではないもの(ガサミ等)は、「はいむるぶし」が主な取引先であるという。

* 「はいむるぶし」の自給自足

「はいむるぶし」は農産物を自前で作ろうと、オープン当初からイスラエル農法を導入し、コンピューター管理によるハウス栽培を続けてきた。ただし、完全な自給自足を考えて行なっていたわけではなかった。ところが、6 年ほど前の大型台風により、骨組みごとビニールハウスが壊れ、イスラエル農法を断念したようだ。

4、「リゾート」と地域産業との関わり

(1)「リゾート」との提携と新規事業

- ・客室清掃は沖縄ダイケンという会社に委託。
- ・港とホテルとの観光客の輸送、物資の運送、寝具等のクリーニングは島内のそれぞれの会社に委託。
- ・地元住民を活かした「はいむるぶし」の小浜島観光プランの創設(地元バス会社との専属契約)⁹⁾ 同様の観光プランは「南西楽園」も現在企画中であり、近々このようなプランを提供する予定だという。
- ・「南西楽園」ではゴルフ場のコース管理を地元の造園業者に委託。
- ・「ダイビング」については両リゾートとも地元のショップと提携。

(2) 島民の雇用についての関わり

尾方(2000)より、1998 年 3 月時点における従業者の出身地と役職・所属部署との関係を見ていく。「はいむるぶし」において、課長以上の管理職は 9 名、正社員 32 人、アルバイト 52 人(通年が 35 人、短期が 17 人)であり、それぞれに占める小浜島出身者の人数は、0 人、4 人、11 人である。部署ごとの人数は、総務部 22 名、営業部 26 名、料飲部 36 名であり、営業部には小浜島出身者が 1 名であるが、総務部には小浜島出身者 10 名、石垣島出身者 7 名と、地元または八重山の出身者が多数を占めている。料飲部では、親会社の社員が勤務することが多いが、料理の仕込み等の調理課のアルバイトは、すべて小浜

島出身者で占められている¹⁰。このような状況について、「リゾート」における雇用の需要（専門的な職種とそうでない職種）が存在するためではないか、ということが指摘されている。

今回の調査で「はいむるぶし」の全従業員（2002年8月現在 122名）における沖縄県内の出身者の割合は30%、その中で従業員の小浜出身者は、正社員、パート・アルバイトを含めて、17名（同割合 14%）であった。年齢層を見ていくと小浜出身者の従業員を年齢別に見ると、若年者（15~24歳）が少ない。雇用形態を見ると小浜出身者従業員の70%（12名）が「パート・アルバイト」等の非正規雇用者であった。また、「南西楽園」では、わずか3名の雇用であり、いずれも「パート・アルバイト」等の非正規雇用であるという。

・リゾート側としては、なるべく地元の人を優先に採用したいとは思っているが、どうしても地元からの応募が少ない。また、石垣の各高校や本島の専門学校へ求人を募集しているがなかなか応募がないという事だった。この事について島内の若者の“若者の都会へのあこがれ”が一つの理由ではないかという事が指摘されている。

・地元の若者のライフスタイルと従業員としてのライフスタイルのミスマッチ

『現在、ホテルで働いている人がどのような人であるのか尋ねてみると、それはマリンレジャーを趣味としている人が多い。ホテルでの勤務は、朝晩は忙しいが昼間は多少暇になる。このため、「中抜け」と呼ばれる休憩時間を取ることが多い。その間に、多くの従業員はマリンレジャーを楽しむ。そのようなライフスタイルを選好するのは本土の若者が多い。地元の若者にそうしたライフスタイルが普及しているかというところではない。「はいむるぶし」ができたことにより雇用機会は確実に増大したが、ホテル従業員としてのライフスタイルと地元のそれとがミスマッチであるため、期待した効果が現れていない。』（松村 2001）

・小浜島では、住宅地としての土地があまりなく、そのため若い人が新しく家を建てられず、島に定住できないのではないかという指摘。

5、小浜島の文化、小浜島民の生活との関わり

御嶽を覆ったリゾート

「はいむるぶし」があるビルマ崎一帯には2つの御嶽があり、これが買収されることにより生ずる島民の精神的なダメージを指摘。しかし、この事も海岸の砂浜から島民が自由に行き来できるため、あまり大きな問題として挙げられていない様である。（「キャロット インターナショナル コーラルアイランド」においては、“コンドゥレース”という、島一番の聖地の近くに造成されることによる島民の心配があった。）¹¹

島の開発による不安

小浜節に唱われている白浜(ウータ)が、台風時に海水が水田に入るのを防ぐためコンクリート護岸によって改変されたという、護岸工事が島の人びとに精神的ダメージを指摘。「昔から島人に愛され、親しく歌い継がれてきた小浜節の精神(こころ)が、あの真白いウータの浜が消え失せつつある現実を前にしたとき、人々の心にどんなイメージを与えるのであろうか」(黒島, 2000)¹²。

「はいむるぶし」が島民の生活にもたらしたもの

- ・教育施設の継続に果たしている「はいむるぶし」の影響。保育園・小中学校とも、「はいむるぶし」の従業員の子どもが占める割合は高いらしい。
- ・祭事において「はいむるぶし」の人々の協力は欠かせない。

〔小浜青年会における「はいむるぶし」従業員の参加等〕¹³

- ・「はいむるぶし」で飼育していたクジャクが、ホテルの敷地外に飛び出し野生化しているという問題。クジャクの野生化に伴い、農業・畜産物に被害が出ている。野生化の被害が表面化してから、ホテル側では有害鳥獣としてクジャクを駆除していた。しかし、駆除の有資格者が亡くなってしまったので、現在は被害が現れる時季に、クジャクの生死にかかわらず、捕えた人から1羽5,000円でホテル側が買い取る決まりになっている。

*消えたリゾート

10年程前に島の北部、ちょうど大岳の後ろに「キャロット・インターナショナル・コーラルアイランド」というリゾート施設が建設された。しかし、バブルの影響を著しく受け、4、5年程前に撤退した。

資料提供・聞き取りに協力していただいた方々

佐俣 豊さん 寺田 一郎さん 仲盛 長儀さん 原 慎二さん 比嘉 康彦さん
仲嶺 真正さん 上原 正道さん 大城 建男さん

参考文献・注釈

- 1 「沖縄県企画開発部地域・離島振興局 離島関係資料 平成 14 年 1 月」
- 2 安里英子 「揺れる聖域 - リゾート開発と島の暮らし - 」(1991) では、造成中であることが述べられている。
- 3 松村 正治 「八重山諸島におけるツーリズム研究のための基礎調査」 竹富島・西表島・小浜島の人々と自然とのかかわりの変遷 「小浜島 小浜島の観光」 2001 より抜粋
- 4 南西楽園 小浜島リゾート HP (<http://www.nanseirakuen.net/>)
ヤマハリゾート はいむるぶし HP(<http://www.haimurubushi.co.jp/>)
- 5 松村 正治 八重山諸島におけるツーリズム研究のための基礎調査 竹富島・西表島・小浜島の人々と自然とのかかわりの変遷 2001「小浜島 小浜島の観光 八重山日日新聞 1972～1979」
- 6 慶田盛正光 「島に生きる」 1988 p209
- 7 西表島土地を守る会 「小浜島におけるヤマハ『はいむるぶし』進出の実態レポート」 1982
西表地区宿泊業組合 「琉球弧の住民運動」 CTS 阻止闘争を拓げる会 1982
- 8 沖縄開発庁沖縄総合事務局 沖縄開発庁沖縄総合事務局総務部調査企画課編
大規模リゾート施設進出に伴う周辺地域の経済・社会調査 1986
- 9 ヤマハリゾート はいむるぶし (http://www.haimurubushi.co.jp/marine/adventure/index_kt.html)
- 10 尾方隆幸 沖縄の離島における観光地域の構造 座間味島と小浜島の比較研究 『沖縄地理』 2000
- 11 安里英子 「ゆるる聖域 - リゾート開発と島の暮らし - 」 1991 p58
- 12 黒島精耕 「小浜の歴史と文化」 2000 p79
- 13 ヤマハリゾート はいむるぶし (<http://www.haimurubushi.co.jp/special/index.html>)